キリスト教解禁前後におけるキリシタン改宗に対する歴史的考察

内　藤　幹　生

明治６年（1873）にキリスト教が解禁になったこと（キリシタン禁制考察撤去）は宗教政策上の大きな変化であった。それはまた , 近世から近代の移行を示す出来事の一つでもあった。キリシタンは潜伏する必要はなくなり , 禁制という国家による政策上の拘束から解放された。しかし , 禁制が解かれたことにより , 新たなる問題も生じた。

本発表ではキリスト教解禁のきっかけとなった浦上四番崩れとキリスト教解禁後のキリシタン集落において , キリシタン自身の信仰をめぐる動向と彼らを取り巻く社会への影響について考察する。そして , キリシタンと彼らを取り巻く社会が禁制されていた近世期からどのように変化したか明らかにする。

当該研究の先行研究は , 権力側の宗教政策の転回と外交問題の経緯から行われてきた。また , キリシタンの動向については宣教師から指導を受けた様子や , 迫害された時のキリシタンの行動に焦点があてられてきた。この時にキリシタンが信仰態度を変えたことが , 彼らを取り巻く社会にどのような影響をあたえ , 問題を起こしたかという問題については見落とされてきたように思われる。そのため , 浦上四番崩れとキリスト教解禁後のキリシタン集落におけるキリシタンの信仰態度と彼らを取り巻く社会との関係に注目し , 分析した。

浦上四番崩れが起こるまで , 何回かのキリシタン露見事件があった。禁教であったキリシタン信者の存在が表面化して問題となったのである。しかし , いずれの事件もキリシタンは自らキリシタンとは名のらず , 取り締まる側も「異宗」という秩序の周縁的存在の宗門として処分された。そして , キリシタンと非キリシタンの一般村民が一体となって事件が拡大するのを阻止した。これは信仰を隠匿しながら継承する近世社会を象徴した出来事であった。こうした状況が大きく変化したのが浦上四番崩れであった。

浦上四番崩れは幕末に起こり , 明治維新まで続いたキリシタン迫害事件である。この時にキリシタンは , それまでの信仰を隠匿していた状態から , 公表して積極的な行動に出たのであった。それは信仰を隠匿しながら非キリシタンと混在していた村社会に変化をもたらすことになった。

宣教師が再来日して布教が開始されると , カトリックへ改宗するキリシタンは増大した。カトリックに改宗して信仰を公表した浦上村のキリシタンは , 自分たちの村ばかりでなく , 他地域にも宣教師を使い , キリシタンに教えを伝え , 改宗を勧めた。そして , 場所を超えた信仰上のネットワークを形成していった。カトリックに改宗したキリシタンは増大化するとともに広域化もしていったのであった。

そのように浦上村のキリシタンが信仰態度を変えたことは彼らを取り巻く周囲との間に問題を起こさざるを得なかった。非キリシタンとは絶交状態になり , 親戚との不仲 , 夫婦離絶 , カトリックへの強引な改宗 , などが村内では起こった。浦上村ではキリシタンと非キリシタンとの間の確執を表面化させ , 村社会のあり方にも変化をもたらした。浦上村村内は非キリシタンとキリシタンとの一体化した状態から , 分裂した不和な状態に変わったのであった。

浦上村がキリシタンと非キリシタンとの間で不和な状態になっていることは権力側にも危機感を持たせた。明治政府はキリシタンの流罪に抗議した西洋列強に対して , キリシタンを浦上村に残して改心の教諭をすると , かえって神社を侮辱し , 他の村民と不和を起こすために場所を移したと弁明した。また , 長崎

奉行はキリシタンの行動を「一味連判」,「切支丹党」,「徒党」などの一揆を連想した言葉で記しており,彼らを警戒していたと思われる。

キリスト教が解禁になると,キリシタンは「禁制」という国家による規制からは解放されて,国家レベルではある程度自由になれた。しかし,彼らを取り巻く村社会・地域社会からは自由にはなれなかった。キリスト教解禁後にキリシタン集落で,キリシタンがカトリックに改宗したことで,村社会の重要な付き合いから外される制裁を加えられ,国家権力機関である警察に仲裁をキリシタンが求める事件が起きている。解禁になったキリスト教（カトリック）は村社会・地域社会ではかえって忌避されるようになった。それは,キリシタン内でも見られ,キリシタンの中でカトリックに改宗しない「離れ」を派生させた要因にもなった。

（大学院文学研究科比較文化専攻研究生）